

東洋文庫近代中国研究委員会編
『明治以降日本人の中国旅行記（解題）』
補遺（戦後篇）

【解説】

1980年3月、東洋文庫近代中国研究委員会は1960年代から蒐集した日本人の中国旅行記を整理し、各冊に解題をつけて『明治以降日本人の中国旅行記（解題）』（以下、本篇）を刊行した。中心となったのは市古宙三で、1874年から1979年までに刊行された旅行記400冊余が年代順に収録されている。

1874年といえば、近代的条約である日清修好条規が締結されて3年目、また、1979年といえば、日中両国が平和友好条約を結んだ翌年にあたる。戦前戦後をまたぐ120余年の日中関係の歴史を、日本人の中国旅行記を介して通観しようという試みは、中国ブームが日本で巻き起こった1970年代末の状況に照らしてみると、まことにタイムリーで意義深い試みであったように思われる。

それから40年を経て、日中関係は大きく様変わりし、かつての「友好」と「反省」という枠組みにはとうてい収まらないほどの錯綜した状況を呈している。そうした中で、日本では資料の公開などにも後押しされて、戦後の日中関係が歴史研究の対象になりつつある。現代中国研究班（国際関係・文化グループ）ではそのような状況に鑑みて、戦後日中関係を研究するための基礎的作業の一環として、本篇には未収録（旧近代中国研究室別置書以外のもの、またはその後購入したしたもの）である戦後の中国旅行記をリストアップし、解題をつけるプロジェクトを立ち上げた。2018年度のことである。作業にあたったのは、総括の村田雄二郎のほか、以下の6名である。池田尚広、久保茉莉子、関智英、中村元哉、山口早苗、吉見崇。

補遺は本篇と同じく刊行年順で並べた。厳密に言えば、旅行記ではないものも含まれるが、日本人による中国滞在の記録とみなせるものは広く収録した。その結果、補遺に挙げたのは、1953年から1979年前後まで刊行された41冊の旅行記である。（補遺には一部本篇と重複したものおよび1980年以降のものが含まれる。）

本来であれば、補遺を本篇と一体化し、かつ現在まで網羅的に収録すべきであろう。だが、1980年代以降は爆発的に中国旅行記の類の出版物が増えること、また、旅行の質や形態も大きく変貌することなどを考慮して、補遺はとりあえず1979年を一つの区切りとすることにした。また、本篇との一体化は技術的に困難なので、便宜的に本篇のPDFファイルをアップすることにした。

現代中国研究班（国際関係・文化グループ）では、今後、より網羅的な旅行記の収集と分析につとめ、補遺を適宜バージョンアップしてゆく所存である。また、内容分析やデータの補充を行うことで、戦後日中関係の研究に新たな視野を拓いていきたいと切望している。広く江湖の理解と協力を仰ぐ次第である。

2021年3月15日

東洋文庫超域アジア研究部門
現代中国研究班 総括
村田雄二郎

【凡例】

- ◆ 書誌情報は本篇にならない、書名、著者、出版地、出版者、出版年、頁数、請求記号、解題の順に並べた。また、末尾に執筆者を記した。
- ◆ 並びは出版年順としたが、出版年が不明の場合、訪中年を出版年と置き換えた。
- ◆ 1952-79年の本篇および補遺の収録冊数は以下の通りである。

年度	冊数	年度	冊数
1952	3	1966	24(6)
1953	2(1)	1967	15(2)
1954	8	1968	3(1)
1955	20	1969	1
1956	14(2)	1970	10(2)
1957	19(1)	1971	10(2)
1958	3	1972	20(12)
1959	6(2)	1973	4
1960	7	1974	11
1961	10(3)	1975	6
1962	4	1976	19(1)
1963	3	1977	21(1)
1964	17(2)	1978	13(1)
1965	13	1979	3(2)
		合計	289

* ()内は今回の補遺を示す。

1953

中国に使して：村山氏帰国歓迎午餐会記録／村山佐太郎 [述]

東京 大日本水産会 1953 31 頁 [Q2039]

著者は1953年9月28日から11月3日まで、大日本水産会顧問として中国通商視察議員団に加わり、両国間の漁業問題について協議するため北京に滞在した。本書は帰国後の歓迎午餐会での関係者の挨拶や訪中報告を記録したものである。内容は、平岡常次郎（大日本水産会会長）、周東英雄（日本遠洋底曳網漁業協会会長）の挨拶、および「中国に使して」と題する村山の訪中報告、帆足計（衆議院議員）「貿易協定について」などからなる。著者は元函館高等水産学校校長で、当時は日米水産株式会社常務取締役を務め、日中漁業懇談会の幹事でもあった。このときの訪中の目的は、水産貿易の促進や、黄海における底曳網漁船拿捕問題について中国側と協議することであったが、10月28日になってようやく中国紅十字会顧問の趙安博との面会が実現した。趙の対応は「今日の中、日両国の政情のもとに於ては漁業問題は文化の交流や経済交流の如きものとは違い極めて解決困難の問題である」と厳しく、「台湾の逆徒国民政府と外交関係を結んで居る」吉田政権に対する中国政府の対決姿勢を崩さぬものだった。「補足報告」は一転して中国社会の大変貌の話になり、街がきれいになったこと、蠅を見なかったこと、売春婦がいなくなったことや、「北京にはドロボー・犬・猫がない。ホテル等で窓を開けばなしにしておいても、少しも心配がない」（31頁）状況がくだけた口調で語られる。

(村田雄二郎)

1956

元軍人団の中国訪問記／訪中元軍人団世話人会編

不明 訪中元軍人団世話人会 [1956] 131 頁 [Q29]

日本の元軍人団が1956年8月9日から9月15日まで香港経由で中国を訪問した際の記録である。謄写版による印刷。団長は元陸軍中将遠藤三郎で、このときは2回目の訪中であった。前年11月～12月の訪中で「毛主席並に周総理が元日本軍人の来訪を希望して居る」旨を受けた遠藤が呼びかけ人となって、戦後初めての元軍人による訪中が実現した。訪中団員15名の内訳は「参観人」13名（金沢正夫、堀毛一麿、土居明夫、茂川秀和、岡崎文勲、景山誠一、眞山寛二、宮子実、町野誠之、犬飼総一郎、金子陸奥三、内野治嘉、清水廉）と「世話人」2名（遠藤三郎、多田伊勢男）で、順に広州—北京—長春—瀋陽—鞍山—旅大（大連）—北京—蘭州—武漢—南京—上海—広州を巡った。この間、訪中団は自動車工場・製鉄所・造船所・タンク学校・戦犯収容所などを見学するとともに、各地で懇談会や講演会を行い、北京では周恩来、彭徳懐、毛沢東ら党政府の要人と会見した。第3章には「視察者の所見」として、訪中団全員の見聞記を収録する。また、付録として遠藤三郎「元軍人の観たる新中国」（初回訪中の視察談）を収める。

(村田雄二郎)

1957

日中の国交回復へ：日本社会党訪中親善使節団報告書／日中国交回復特別委員会編

出版地不明 日中国交回復特別委員会／日本社会党教宣局出版部 出版年不明 [1957]

180 頁 [Q2030]

社会党訪中親善使節団（1957年4月10日～4月26日）の報告書である。団長は党書記長浅沼稻次郎、団員は日中国交回復特別委員会委員長勝間田清一、国際局長佐多忠隆、企画局長曾禰益、外交部長穂積七郎、日中国交回復特別委員会副委員長山花秀雄、政策審議

会副会長兼事務局長成田知己、日中国交回復特別委員会事務局長佐々木良作、随員は米山雄治、佐藤拓弥である。報告書は「報告概要」、「正式会談報告」、「共同コミュニケ正文」、「主要なる声明、挨拶、講演要旨」で構成されている。この報告書によれば、中国側と9つの分科会に分かれて意見交換したとのことである。その分科会とは、日中国交回復に関する基本方針、アジア並びに一般国際間に於ける共通の問題、日本と中国との経済提携、貿易の一層の促進、漁業に於ける協力、技術交流、文化交流、気象及び郵便業の協力、居留民の往来・遺骨の相互送還である。同報告書は、アジアの平和外交、すなわち「日中の貿易拡大、通商、漁業、定期航路の諸協定」から国交回復を成し遂げるとし、「すでに今日、中国を知らずして、中国を抜きにして、アジアの平和と社会主義的な経済建設を語る」のは「許されない」と訴えている。なお、出版年は1957年だと思われる。

(中村元哉)

1959

上海にて／堀田善衛著

東京 筑摩書房 1959 208頁 [15736]

堀田善衛は1945年3月から上海に滞在し、終戦後は国民党の宣伝部に留用され、翌年12月日本に帰国した。本書は、1957年10月の日本文学者代表団で上海を再訪した後に書かれたものであり、戦中戦後の上海滞在時の回想を含む。代表団団員は堀田のほか中野重治、井上靖、本多秋五、山本健吉、十返肇、多田裕計だった。滞在したのは10日前後だが「第一日目を除いては、ほとんど計画されていた見学には参加しないで、ひとりで町の三輪車を拾い、電車、無軌道電車〔トロリーバス〕に乗り、あるいは徒歩で、勝手知った町々を歩き回った」。代表団が宿泊した錦江飯店が、かつて日本の十三軍司令部のあった建物ではないかと若い中国人通訳に尋ねた堀田は、「むかしのことは知りませんね」と返され、この青年が敢えて知らないことにしているのではないかと自問する。一方、復旦大学で堀田自身が上海の「属性」と認めてきた乞食、淫売、浮浪者、失業者、ギャング、泥棒、スリ、カップライ、外国人、外国兵の話をしたところ、若者にはまるで理解されず、確かな時間の経過というものを実感させられてもいる。再訪時の上海について印象を述べる時、かつての工場労働者や子どもの窮状が改善された現状を実見しながら、堀田は自身の感じる「都会の魅力」には“貧窮”というものがついて回っていた。こうした終戦前後と1957年の再訪を行き交う堀田の所感に「惨勝・解放・基本建設」を経て変化著しい上海に対する内面の複雑な心境が現れる。また終戦翌年に堀田は戦中の対日協力者とされた中国人の死刑執行を目の当たりにしているが、「“敵”と“味方”と“漢奸”の、この三者の流した血が沈んで行って、その上に更に、解放のために流されなければならなかった血が加わり、歴史という、どろどろのアスファルトか、溶岩流のようにもどす黒い、すざまじい〔ママ〕ものが目に見えて来るようになって行った」と述べている。戦後派作家として知られる堀田の原点には戦中から戦後にかけての上海での体験があるとされるが、同書は自身と中国人との間にある戦争責任を孕んだ個人の自省と占領当時の上海に対するノスタルジーを断片的に伝えている。

(池田尚広)

新中国見学記：一教師の視察報告／田中剛著

東京 理論社 1959 173頁 [Q2038]

著者は東京商科大学（現在の一橋大学）教員養成所を卒業した中学教諭で、訪中時は鳥取県中学教職員組合書記長だった。本書はその著者が1957年に日本教職員組合海外教育視察団の一員として、約50日間訪中した際の視察記である。恩師上原専祿の紹介で本書を上梓することになったという。本書の記述から察するに、著者は戦前中国で教職につき、満洲にも一時滞在しており、敗戦後引き上げたという経歴を持つ。そのため、中国語の会話

が少しできたようだ。視察団の旅程は、バンコク—ラングーン—昆明—北京—瀋陽—撫順—鞍山—長春—ハルビン—西安—南京—上海—杭州—広州で、北京では周恩来の接見もあった。最も長く滞留した北京では、鉄路学院、中央民族学院、北京監獄、中華全国総工会、北京体育学院、北京師範学院、北京大学、故宮博物院、農業生産合作社、中国教育工会、新民主主義青年団を訪問している。全体として、訪問先は大学や小中学校などやはり教育関連の施設や組織が多い。視察団がハルビンに来たことを新聞で知った残留日本婦人約 50 名が視察団に会いに来たなど、印象的なエピソードも記される。筆者は中国人の通訳の姿にも場面場面で注意を向ける。「中国では私的な会話は別として、公的な会話は、どんなに日本語のできる人でも、絶対に日本語を使わない」（33 頁）とは、戦前に日本と関係のあった中国人が置かれていた微妙な立場をうかがわせる観察である。

(村田雄二郎)

1961

人民の国、中国の婦人たち：私たちの報告：1961／日本中国友好協会訪中婦人代表团 東京 日本中国友好協会訪中婦人代表团 1961 56 頁 [Q2041]

日本中国友好協会訪中婦人代表团が 1961 年 6 月 14 日から 7 月 16 日まで北京、天津、上海、杭州、広州を訪問した際の記録である。代表团は、中華人民共和国全国婦女聯合会副主席の許広平らと会談している。この報告書には北京市婦産医院授乳室、虹橋人民公社などの現状に対する感想が綴られ、女性の視点から当時の中国情勢が記されている。代表团団員は河崎なつ（団長）、川上とし子（秘書長）、梶谷和子、山本信枝、立木千秋、村上あい子、苫米地章江、武藤光子、宅島綾子、佐藤スミ、櫛田鉦二郎（作業員）。

(中村元哉)

躍進する中国を訪れて：訪中期間 1960. 12. 3～1961. 1. 11／民主々義擁護群馬県民連合訪中代表团編

出版地不明 民主々義擁護群馬県民連合訪中代表团 1961 62 頁 [Q2049]

民主主義擁護群馬県民連合訪中代表团が角田儀平治——民擁連議長で 1960 年 4 月から 5 月の日中友好協会訪中団の一員でもあった——を介して 1960 年 12 月 3 日から翌年 1 月 11 日まで中国を訪問した際の記録である。主な訪問地は、広州、北京、瀋陽、撫順、鞍山、天津、三門峡、洛陽、鄭州、武漢、南京、無錫、上海、杭州だった。一行は、北京で陳毅副総理兼外交部長、郭沫若平和委主席、廖承志 AA 連帯委主席らと懇談し、天津で中国人民保衛世界和平委員会天津市分会と共同声明を出した。報告書は「社会主義建設における大躍進が保障されている」と述べ、掲載された写真も中国の発展ぶりをイメージさせるものだった。たとえば、鄭州の人民公社での「土法」を紹介したページでは、「『技術の神秘性』を打破することが技術革新の道だと言って労働者も技術者も一つになって学習と実践に取り組んでいる」と肯定的に記されている。当時の日本において中国認識がどのように形成されていったのかを知る上で、大いに参考になる一節であろう。代表团団員は石黒寅亀（団長）、安藤安次郎（副団長）、金子満広（副団長）、布施甲子郎（秘書長）、久保田朝雄、佐藤清一、鈴木正、林金衛、畑利、猪上輝雄。

(中村元哉)

新中国に奇蹟はない／日本中国友好協会第三次訪中代表团

出版地不明 出版者不明 1961 32 頁 [Q2051]

宮崎世民を団長に、日本中国友好協会各支部（山梨、伊勢崎、大牟田、高知、石川、釜石、杉並、神戸、岐阜）の支部長・事務局長・常任理事など 10 名の訪中記録。一行は 4 月 25 日に羽田を発ち、香港を経由して広州—北京—瀋陽—三門峡—洛陽—上海—杭州—武漢—長沙—広州を経て、6 月 11 日に帰国した。活動内容は項目ごとに、工業建設、農村人民

公社、魯迅記念館、都市人民公社、文化娯楽と労逸結合、学校教育、人民大会堂、上海工人文化宮と少年宮、北京メーデーに参加して、上海の大世界、上海労働運動史、北京児童病院、郭沫若氏との会見記、栄光の里「韶山」を訪ねて、とまとめられている。目を引くのが「中国農業の災害について」で、1959, 60年と続いた旱魃が「中国百年来のもの」で、広州から北京までの車窓からは「殆ど上作とみられる麦はなく種子取りさえむずかしい様な畠が見渡す限り見られる状況がしばしばであり、今年も相当な被害で〔中略〕解放前であったならおそらく餓死者は、二千万人から三千万人位出て相当な困乱があったろうと思われる」と記録されている点で、被害の大きさをかなり正確に把握していたことがわかる。
(関智英)

1964

世界を動かす巨人に会って：中共を視察して祖国日本を想う／木村武雄著
米沢 米沢交友会 1964 144頁 【Q2035】

著者は山形県米沢市出身の政治家で、1936年衆議院議員に初当選した。日中戦争が始まると、同県鶴岡市出身の石原莞爾に弟子入りして東亜聯盟運動に加わり、中国に6年間滞在した経歴を持つ。本書は二部構成で、第一部「世界を動かす巨人に会って」は欧米歴遊後の講演録であり、第二部「中共を視察して祖国日本を想う」が、1964年9月～10月に北京―西安―重慶―武漢―上海―南京―杭州―瀋陽を巡った旅の印象記である。序文は佐藤栄作による。著者は革命後の中国を日本の明治維新と重ね合わせて追体験しており、中国の核実験成功についても、「勤儉建国、勇奮祖国の民族運動」の発露だと評価している。また、戦前の上海滞在経験との対比で、治安の向上や民生の安定を好意的に観ている。とくに、道路の清潔さや蠅・蚊の撲滅など公衆道徳の普及ぶりに瞠目し、その功を「教え導く政治」に帰しているが、他方、「中国人の生活水準が今の日本に追いつくまでには百年間かかるだろう」という陳毅副総理の言葉に賛同し、「貧乏人が貧乏人のままで、統一した政権をつくったのが社会主義なのであります」（137頁）として、次元の高い政治をしている日本にとって、中国畏れるに足らずと結論づけている。

(村田雄二郎)

中華人民共和国建国十五周年慶祝日中友好協会派遣第九次訪中団記録
出版地不明 出版者不明 1964 25頁 【Q2050】

人民共和国成立15周年の国慶節に参加するため組織された訪中団の記録。公式記録ではなく、各団員手許の資料として200部のみ作成・配布された。団長松本治一郎、副団長宮崎世民、団員に角田儀平治、檜崎彌之助ほか。一行は9月26日に羽田を出発し、香港を経て広州―北京―西安―延安―鄭州―武漢―南京―上海―広州を巡り、10月30日に香港より帰国した（団長の松本は健康上の理由で10月10日に北京を離れた）。10月11日には、1945年に人民解放軍に医師として参加し、50年に脳膜炎のため死去した中村雄三「烈士」の遺骨伝達式が催された。上海での民族資本家との懇談会で記録された、陳銘珊（上海信誼藥廠々長）・貝竹韻（黄浦区手工業局副局長）・蔣達寧（上海市工商業聯合会副秘書長）の発言要旨は、1940年代から50年代にかけての上海経済界の事情を伝えている。宋子文の「民族資本がやれなければ、倒したらよい、アメリカから工場を持って来る」との発言に皆が怒ったこと（陳）、「共産党が来るときは恐かった」（貝）、といった発言は興味深い。

(関智英)

1966

私の中国旅行：革命・自衛・再建・自力更生の中国／山口清一著

大阪 現代理論社 1966 12、193 頁 [15641]

和歌山県新宮教会長老も務めた山口清一が、山崎利雄団長ら総勢 20 名で構成された日中友好協会旅行団（第 3 回 203 団、1965 年 4 月 27 日出発）に参加した際の旅行記である。香港—広州—北京—南京—蘇州—上海—杭州—広州とまわって帰路についている。北京では、周恩来首相、南漢宸中国国際貿易促進委員主席、楚図南中国人民対外文化協会会長ら以外にも、趙安博、楊温玉、勇龍貴らと会談している。著者は中国の専門家ではなく、一人の日本人の視点から当時の中国をあるがままに記述している。

(中村元哉)

中共を視察して／大宅壮一 [述]

出版地不明 出版者不明 1966 年 10 月 6 日午後 2 時 54 頁 [Q2052]

大宅壮一を団長に大森実、三鬼陽之助、藤原弘達、梶山季之らノンフィクションライターで組織された中国視察団の、大宅壮一による講演録（『自警』第 48 巻第 11 号、1961 年 11 月に同名記事あり）。大宅らは日中旅行社に 60 万円を払って視察を実施したが、これに対し「ソ連の倍くらい」で「暴利をむさぼっておるわけです」と手厳しい。一行には「通訳と称するのが」についており、中国入国後、最初に睨まれたのは移動の自動車の中で「支那の夜」を歌った藤原弘達であった。まもなく大宅自身も「毛沢東の説教」に辟易して発した「毛沢東はモウタクサンダ」との発言で、通訳より嚴重抗議を受ける。「あの国は外国に対して非常な憎しみというのを持っており、その憎しみがあの国の原動力になっている」という指摘や、文革についての「文化とは何のかかわりもない。文化の名において文化を破壊する。〔中略〕一種のクーデターです」との説明は、いわゆる「親中派」の見方とは一線を画する。よく知られる「砂利革命」についても触れ、「一番活発な発言をするのは中学生から高校生〔中略〕しかも中学生、高校生の中で猛烈に強いのは女です。女の砂利です。そういう者をうまくおだてているわけです」と紅衛兵の文革における役割を明快に説明する。さらに映画に現れた毛沢東を見て、「老境というよりももうろくに近い。一節によると脳軟化症にかかっているという説もある」と、最後まで大宅ならではの批判精神溢れる視察記録となっている。

(関智英)

見てきた文化大革命／小坂善太郎 [述]

東京 新財政研究会 1966 50 頁 [Q2031]

本書は、小坂善太郎（自由民主党衆議院議員）が川野（参議院議員）と約 4 週間訪中し、帰国後翌日の 1966 年 9 月 26 日に文化大革命の現状について語った記録である。王曉雲らの出迎えをうけた訪中行程は深圳—広州—北京—洛陽—武漢—上海—杭州—広州というルートで、北京では周恩来、陳毅、郭沫若、廖承志らと接見している（毛沢東と林彪には会う機会がなかった）。小坂らは、文化大革命が発動された理由はベトナム戦争によるのではないかと推測している。また、この訪中で中国側が具体的に述べた数字は「1965 年の穀物の総生産が 2 億トン」だということと「人口が昨年で 7 億」だということだけだったとも述べている。さらに、中国側は佐藤首相が政経不可分の原則を支持して国交回復することはあり得ないと見立てている、とも記している。

(中村元哉)

東風の中を行く／西浜二男著

東京 真誠書店 1966 172、16 頁 [Q2033]

著者は訪中当時、目黒区議会議員（社会党）で国際貿易促進議員連盟の目黒区議会事務局局長を務めていた。本書は、訪中日本友好視察団第五団員の一人として、1965 年 10 月 22 日から 11 月 19 日まで香港—広州—武漢—北京—南京—蘇州—上海—広州を巡った際の旅行記である。北京で廖承志、西園寺公一らに面会したほか、人民公社、鉄鋼コンビナート、

小学校などを見学する定番コースであった。「大地に立つ——四千年の歴史のあとに」「百聞は一見に如かず——その見たまま、感じたまま」「明日を探る」の見出しの下に、訪中時の見聞や感想が記され、著者による旅先のスケッチも所々にはさまれる。著者の観察は、蠅やネズミがない、忘れ物がもれなく届けられる、泥棒がないなど、革命後の大きな社会変化に賛嘆する、この時期の訪中団に特徴的な紋切り型である。「解放」後の中国社会の安定、民生の向上、衛生の改善、経済の発展、教育の普及などが肯定的に紹介され、最後に日中の友好増進と早期の国交回復が説かれる。

(村田雄二郎)

新中国視察報告書：1966／日本乾電池工業会編

東京 日本乾電池工業会 1966 112頁 [Q2040]

中国最近の乾電池の生産事情およびその需要背景を知るために組織された乾電池及び関連企業の代表13名からなる視察団の記録。団長は日本乾電池工業会会長の藤室益三（東洋乾電池取締役社長）。日程は4月11日に羽田を立ち、香港—広州—上海—南京—天津—北京—広州を経て、4月25日に帰国した。滞在は短期だったものの「従来全く知られていなかった中国における乾電池工業の概要」を明らかにした点は「決して小さな収穫ではなかった」と自賛しており、その報告である「中国における乾電池事情」は専門的な内容もふくめ簡潔にまとめられている。参加者による「中国の化学肥料工場見学記」「新中国北京電池廠参観感想」なども興味深い。団長の「諸設備や、その技術そのものが、あまり感心するものではなかったが〔中略〕従業員達の真剣さには大いに打たれるものがあつた」との感想は、中国の産業事情の核心をついているように思われる。何よりも面白いのは口絵で収められている「中華人民共和国製乾電池」一覧表で、今では失われてしまったであろう、全国の各地の乾電池の図柄を色刷りで見ることができる。

(関智英)

中共雑観／小坂善太郎 [述]

出版地不明 内外情勢調査会 出版年不明 57頁 [Q2037]

1966年8月末から約1ヶ月中国を訪問した衆議院議員の講演記録である。著者は自民党内のいわゆるハト派議員であり、1972年の日中国交正常化の際は、日中国交正常化協議会会長として、田中角栄首相訪中の環境づくりにも貢献した。本書では、文化大革命が始まったばかりの時期に広州、北京、洛陽、武漢、上海、杭州を訪れた著者の見聞や印象が語られる。小見出しを順に掲げると、「毛一色の中に入る」「一闘、二批、三改」「大革命への三つの原因」「人間第一、人海戦術が中心」「紅衛兵の五つの要求」「非常に貧しい民情」「強調される精神面」「積極的な産児制限」「都市と農村の格差」「徹底した均衡財政」「まず国内引き締め」「根本は憎しみの哲学」「日中人事交流にちゃんとしたルートを」「白眼をもって見ず、青眼をもって見よ」。産児制限について、著者が「一般の産児制限の器具を使うほかに、晩婚の奨励をやっている。二十五歳ぐらいまでは女の子も独りである。法律は十八歳からだそうですが、男は三十ぐらいまで晩婚でがんばれということだそうです」と述べるのは、文革が産児制限を緩めたとの通説に照らして、やや意外である。また、経済の専門家に対し、財政について詳しく説明してほしいと苦言を呈したところ、わきにいた人が「いま、われわれはねらわれているのだ。みんなから攻められようとしているときに、内輪のことはあんまりいえませんよ。日本だって戦争のときはそうだったでしょう」と発言するくだりは、文革初期の緊迫した雰囲気伝える。

(村田雄二郎)

1967

中国の旅から／小山一平著

長野 長野県中国研究会 1967 232 頁 [Q2034]

中国人民外交協会の招きで、日本地方自治代表団の一員として訪中した際の記録。著者は当時、長野県上田市市長。旅程は1965年4月28日より6月3日まで、北京—ハルビン—長春—瀋陽—撫順—武漢—南京—蘇州—上海—杭州—広州—仏山を歴訪するものであった。北京では人民大会堂で開かれたメーデーの前夜祭に参列し、周恩来総理の茶会に招かれた。このとき同席した日本人の中には、滝沢修を団長とする新劇関係者や大松博文率いるバレエ選手団などの顔もあった。人民大会堂では郭沫若とも懇談している。著者は社会主義中国に対して、物質的・消費的欲望を是認する日本社会と「全く異なった思想、倫理によって、新しい経済、社会機構の国家と個人生活を創造しようとしている」、「幼少の頃から徹底的に行われている政治思想教育は、それを可能にするための人間づくりの教育である」、「毛沢東主席と中国共産党の指導にたいする全面的信頼のもとに、六億五千万が一致団結して国家建設に邁進している姿は、驚くべきものがあり、社会主義建設は成功裡にすすめられて、着々と、強大にしてゆるぎなき国家が築かれつつある」と肯定的な眼差しを向けている。

(村田雄二郎)

**文化大革命下の上海、南京において：華中方面視察報告／高碕事務所編
出版地不明 高碕事務所 1967 41 頁 [Q2045]**

高碕（達之助）事務所が1967年4月10日から8日間、北京駐在連絡事務所の野口一郎、内田禎夫、東京本部の宗像善俊、須田生三の4名を華中に視察させた際の出張報告書である。彼ら4名の目的は、文化大革命下での南京、蘇州、上海の工場施設や人民公社の現状を視察し、あわせて1967年初頭に上海で発生した文化大革命の動向を分析することだった。この報告書には、学術研究にとって興味深い記述が散見される。その一例を抜粋すると、次のとおりである。「造反派や紅衛兵との会話を通じて、今回の文化〔大〕革命に関し、その主観的に追求する目標＝理想が現実に生じた大きな混乱と犠牲の代価を支払ってもなおお価値あると考えられる程度に本当に実現可能なかどうか、といった点には依然として大きな疑問が残る。そして、人心の末端に至るまで極端な形で浸透しつつある毛沢東主席に対する個人崇拜については、問題があるのではなからうか」、「今日の日本のラジオ工場などに比べると、技術的に相当遅れていることは明らかだが、賃金コストの低さから考えれば、労働集約的技術は十分にその基盤をもっているわけであり、これでもう少し能率が上がってくれば、確かに東南アジア等への輸出市場では日本製品の脅威になるかも知れない」。

(中村元哉)

1968

中国から帰って／岡崎嘉平太 [述]

東京 国民政治研究会 1968 51 頁 [Q2046]

日中総合貿易連絡協議会会長の岡崎嘉平太が1968年2月1日から3月9日まで北京を訪問した際の記録である。日本側の参加者は古井喜実（団長）、岡崎嘉平太、田川誠一、中国側の参加者は劉希文、王曉雲、孫平化であり、LT貿易からMT貿易へと切り替わる際の日中間の交渉過程の一端が記されている。この記録が興味深いのは、「文化大革命は収拾の段階にある」との認識が示されていることである。現在の文革研究も1967年から1968年にかけて一旦収束に向かいつつあったと評価していることから、この点に限定していえば、妥当な中国認識が示されていると言えよう。なお、26頁以降は、対話形式となっている。

(中村元哉)

1970

中国見たまゝきいたまゝ／内藤誉三郎著

出版地不明 出版者不明 出版年不明 48頁 [Q2036]

著者は1970年3月、古井喜実、田川誠一らの日中覚書貿易代表団に加わり北京を訪問した。団長松村謙三（松村は5度目の訪中）に随行するかたちでの初めての訪中であった。帰国後、著者が『読売新聞』『毎日新聞』に掲載した文章をまとめたのが本書である。

「中国見たまゝ」「中国の教育を見て」のほか、「周総理と松村訪中団との会見における周総理発言要旨メモ」「日本側の周総理会談メモに対する中国側の訂正意見」を収める。著者の当時の肩書は、参議院文教委員会委員、自民党文教制度調査会副会長、自民党神奈川県連顧問、大妻女子大学学長。文革期中国に対する著者の観察・印象は概して好意的で肯定的なものである。曰く「服装は質素ではあるが、洗たくがよくゆきとどいて、小ざっぱりしている。自分さえよければ他人にはどんな迷惑をかけても構わない、人を押しつけても自分だけは出世したい、金持ちになりたい、楽をしたいという、いわゆるマイホーム・エゴイズムの風潮は影をひそめている。」（9頁）

（村田雄二郎）

水野・山下訪中報告／水野清、山下徳夫〔述〕

出版地不明 アジア国会議員連合 出版年不明 25頁 [Q2048]

衆議院議員水野清と同議員山下徳夫の訪中記録である。日本側の団長は川崎秀二、中国側の参加者は王曉雲、呉曙東、許宗茂と通訳の関氏（女性）であり、訪中期間中に周恩来総理、王国権らとも意見交換している様子が分かる。文中に「去年の佐藤・ニクソン会談後の共同声明」、「韓国と台湾を昔のように植民地化して自分達の勢力範囲に引込もうとしている」とあることから、この訪中は1970年、出版された年も1970年と推測される。主要な話題は、日本の軍国主義復活の可能性、中国の賠償請求の可能性などについてであった。興味深いのは、周恩来総理が「蒋介石の悪口を言わな」かったことに対して、「今迄と比較して変化であります」と記していることである。なお、「ニクソンがやって来ることを末端にも徹底して説明しているようでした」と記されている点は、やや不可解である。

（中村元哉）

1971

下定決心不怕牺牲：第六次訪中学生友好参観団七〇年夏訪中報告集／第六次訪中学生友好参観団訪中報告書編集委員会編

東京 斉了会：第六次訪中学生友好参観団 1971 111頁 [Q57]

斉了会（ちいらかい）とは、1965年から始まった訪中学生友好参観団の別称で、1972年の第8回まで毎年組織された。訪中した団員は総計800名に上る。会の名称は、通訳の発する「集まりましたか（斉了嗎？）」が団員の記憶に強く残ったことに由来する。本書は、1970年8月7日から8月30日まで訪中した第6回訪中学生友好参観団の記録である。編集委員会代表は若林正文。書名の「決意を固め、犠牲を恐れず」は、文化大革命の当時広く唱えられた毛沢東語録の一つで、「万難を排して勝利をつかみ取る（排除万難、去争取勝利）」と続く。参観団の訪問地は、広州—長沙—韶山—萍郷—寧崗—井崗山—吉安—南昌—上海—北京というように、中国革命の足跡をたどる旅であった。また、北京では首都紅衛兵の歓迎を受けて、人民公社を見学し、清華大学では革命委員・学生・労働者と座談会を開き、さらに夜は「革命的現代京劇」を見るなど、プロレタリア文化大革命を実地に体験する記録集となっている。学生の見聞記の中には、中国で進められていた「教育革命」

を日本の学生運動のあり方と結びつけて理解するような記述も見られる。革命による社会の大きな変化に対する賛辞や社会主義への共鳴をかくさぬ字句も、随所にあらわれる。「ホテルでも鍵をかける必要がなく、落とし物をしてもしばらく届けてくれるし、役人風を吹かす人もなく、社会主義国だから企業間の過酷な競争や、不当表示、着色剤などを用いる商品もない。嘘とか生存競争といった言葉はおよそこの国には相応しくない。また礼儀などもすべてに四角張らず、簡素に、心をこめて行うのが今の中国である」(5~6頁)。資料編には、広州で面会した郭沫若の談話、および北京で面会した徐明の談話を収録する。なお、斉了会の歴史に関しては、関係者の回想など綴った『斉了会の50年 訪中学生友好参観団の軌跡 1965年~2015年』(斉了会編、2015年)がある。

(村田雄二郎)

新しい中国：写真集／「新しい中国」編集委員会編

東京 総評資料頒布会 1971 472頁 [Q2054]

前半は当時の中国の様子を伝える写真(主に白黒)で、これが全体の約85%を占める。総評(日本労働組合総評議会)の刊行物ということもあり、田英夫ら社会党・公明党関係者の交流の写真が複数掲載されている。前総評事務局長で日中国交回復国民会議事務総長の岩井章による「発刊のごあいさつ」によれば、本写真集は「過去の歴史を知り、未来に備えるという願いを込めた労作」とされるが、過去の歴史に関する写真はあまりなく、主要年表の範囲も1971年1月から10月と限定されている。いずれの写真も中国が外に見せたかたがたの側面を切り取り、写真によっては毛沢東語録の一節がキャプションに付されている。ただ操車場の写真(p.198)に写り込んだ客車の側面には何らかの標語が書かれ、車両がかなり傷んでいることがわかる。巻末「資料編」には中国の政治機構や承認国一覧、各種声明文に続き、「私の見た中国」と題して岩井章・市川雄一(公明党機関紙局長)など6名のエッセイ、330ほどの友好商社の一覧表(社名・所在地・電話番号)が掲載されている。

(関智英)

1972

杏の街かどから：中国の主婦として二十九年／佐々木ハル子著

東京 光風社書店 1972 231頁 [Q1991]

著者は岩手県気仙郡世田米町の出身で、1942年チチハルにわたり、満鉄病院に務めた看護婦である。敗戦後は中国に残留し、戦後の混乱の中でチチハル、長春、そして天津へと移り、都合29年間中国に居住して1971年に帰国した。本書はその半生の回想記である。チチハルではソ連兵の略奪、長春では国共内戦を経験した著者は、中華人民共和国成立後、天津市立工人医院に勤務しつつ、中国人の夫との間にもうけた一人娘を育てた。集団化時代の中国を留用日本人として生き抜いたエピソードの数々が淡々と綴られる。66年の毛沢東の長江遊泳を機に天津で水泳がブームになったこと、71年のシアヌーク訪問の際に女性のスカートが復活したことなど、日常を淡々と記す筆致は時代の証言として一定の価値がある。生活必需品の値段や配給品の量も細かに記され、社会主義時代の労働者の家計の状況がよくわかる。

(村田雄二郎)

ぼくの北京留学：バレエと文革と青春／林道紀著

東京 講談社 1972 204頁 [Q1634]

著者は1965年11月から1969年9月まで北京芭蕾舞学校でバレエを学んだ。父親は友好商社である日本景徳鎮株式会社の代表、父方の祖父は林弘吉、母方の祖父は画家陳包一である。入学後まもなく文化大革命が始まる。当初は外国人であるため蚊帳の外に置かれ

るが「紅色娘子軍」「白毛女」は、民族的で革命的なバレエだ。これからも創作されると思う」「ぼくも同学、中国人といっしょに文化大革命を闘いぬこうと、一人で決心している」というように文革が芸術活動に与えた影響の中で感化される著者の感想が印象的である。革命運動への参加が許されると、周口店で学校の集団下放を2週間経験したり、紅衛兵とともに毛沢東、周恩来の接見にも参加したりするなど、自らが「革命師生」になった自覚と感動を述べている。学校内は井崗山公社派と毛沢東主義陣線派に分かれ、著者は前者に属す。両派が一時統一されると直後のバレエ公演「白毛女」では悪役の家丁を演じた。上海にある祖父母の墓がブルジョアに属すとして破壊されたことに不満を持ったこともあるが、著者は基本的に一貫して革命運動を中心とする中国の現状に賛同しながら勉学と稽古に励み、1969年3月に卒業してからも帰国を半年遅らせた。1971年に松山バレエ団の訪中公演の一員として再度訪中。広州、北京で公演を行い、延安も訪れた。公演は周恩来、郭沫若、廖承志、王国権も観劇した。断片的ではあるが留学中は西園寺公一に会ったことにも触れている。

(池田尚広)

中国のバカ：日本のバカ／葛西純一著

東京 太陽社 1972 264頁 [Q1848]

奥付によれば、著者は1922年に宮城県子牛田町に生まれ、1940年に満鉄社員、43年に関東軍兵士になったという。1945年に八路軍(のちの人民解放軍)に入って助理軍医と通訳を務め、1953年に帰国した。文中から察するに、林彪率いる第四野戦軍に属していたようだ。「中国には「定価」(原則)と「交渉」(人間関係)の間には「幅」があって、その幅は日本よりはるかに大である」「要は、中国には「裏」と「表」があり、日本のように「表」だけではない(112頁)」という著者は、中国の「裏」を事情通よろしく、個人の体験談やエピソードを交えて、かなり露悪的に語る。下ネタ話も頻出し、辞書にはない中国人の罵り言葉をこれでもかと列挙する筆調からは、日中友好人士に冷水を浴びせたいとの著者の狙いが垣間見える。短編のエッセイのほかに、「未帰還者」と題する自伝的小説、また「中共軍従軍句集」があり、とくに後者は一定の資料的価値がある。さらに付録として「中国語学校一覧表」、「中国関係団体」、「満蒙関係団体名簿」(「満蒙同胞援護会資料に基づく」)を収める。

(村田雄二郎)

素顔の中国／聖教新聞社編

東京 聖教新聞社 1972 226頁 [Q1979]

岩村三千夫、西村忠郎、高田富佐雄、菅栄一、山田礼三、野村浩一、宮川寅雄、藤堂明保、香坂順一、山口一郎、新井宝雄がそれぞれ中国について書いている。『聖教新聞』1971年1月から12月まで連載されたものが書籍化された。高田富佐雄は1964年4月、松村謙三の第三次訪中に同行した。四川省の新民人民公社で現地の基本的な事柄を聴取する一方、かつては地主の所有物であった豪華な紫檀の寝台で寝る人民公社社長の姿は「革命がもたらす人間の変化を、痛烈に印象づけるとりあわせであった」。翌1965年にはかつて学んだ同文書院のあった上海を訪れ、中国人街半淞園の変化を目の当たりにした。菅栄一は1964年9月から1966年10月まで北京に滞在した。第一印象は「伝えられるよりも、はるかに物が出回っている」ことで、特に食糧事情に杞憂がないことを述べる。滞在中はよく民衆のデモ行進や集会を目にしたが、総じて規律正しく整然と行われていると感想を述べ、「文化大革命のなかで紅衛兵が登場したのも、このような大衆運動でつちかわれた基盤があったからだ、いえるのでは」としている。宮川寅雄、野村浩一は1971年6月、日本文化界訪中団で白石凡、藤堂明保、尾崎秀樹らと訪中した。周恩来と会見し、郭沫若の案内で故宫博物院を見学したほか、大学や中学校などの教育現場や「崇文区五・七幹部学校」を訪問している。宮川は北京大学の視察において、哲学系の研究対象に「実験論、生

産力論、人生論の三つの毒草に対する批判」があることに注目し「現代修正主義に対する闘争という政治的要求に結びついたもので、当然、中国人民の世界観の変革に役立つものであろう」と肯定的な感想を述べている。同年10月に訪中した香坂順一は、広州の中山大学で針麻酔による甲状腺腫瘍と腎盂結石の手術を見学した。ここに毛沢東が提唱した「古為今用、洋为中用」を見るとともに、この姿勢が現代京劇、現代バレエにも表現されているとの感想を記す。また1966, 67年にも訪中した経験から、文革前後の変革の軸となっているものは「階級観点の徹底的な確立である」と述べている。

(池田尚広)

北京日記／嶋倉民生著

東京 日本経済新聞社 1972 319頁 [Q1996]

著者は1969年から1972年まで日中覚書貿易事務所の所員として北京に滞在した。主に滞在中の日常、毛沢東、周恩来など指導者に関する散文、社会主義建設に関する見聞、MT貿易業務に関わる話題からなる。人民公社の視察を通じて中国の優れた点として生産隊ごとに保健担当者がある医療制度を挙げ、古井喜実の希望で人民解放軍を視察した際には食糧などの自給率の高さが印象深かったとしている。清華大学や五・七幹部学校など社会主義の現状を視察するほか、北京の大柵欄街地下壕も見学した。全長2キロ、最高深度8メートル、通風管、照明、電話、有線放送、WC、食糧倉庫、炊事場、休憩室、会議室があり、有事の際には1万人が宿泊できるといふ。仕事の面では自身の造語で「MT四原則」なるものを掲げている。第一は「運動の原則」で貿易によって日中友好を拡大すること、第二は「ノンポリの原則」で日中友好の目標の障害物（具体的には中国敵視政策）を除去すること、第三は「社会主義理解の原則」、第四は「中国指向の原則」で脱亜入欧論的な人物には中国を本当には理解できないとするものである。言論の自由や社会制度の違いについて議論したり、家永教科書裁判の話題から日本における司法権の独立について説明して理解を得られなかったりと、中国人と率直に対話する機会もあった。地下壕を掘っている現場を不用意に撮影して群衆に囲まれたり、壁の毛語録スローガンが塗り潰されたりしているのを見て文革の下火を実感するなど、時勢を肌で感じとった記述も多い。

(池田尚広)

僕らと隣あう8億の友だち：世界の焦点・新生中国のすべて／名古屋テレビ報道部

東京 青年書館 1972 190頁 [Q2004]

名古屋テレビ報道部の7名による共同執筆。詳細な時期は不明だが1971年から72年にかけて中国各地取材した際の記事77篇と座談会「日本人が遠くしている中国」を収める。取材班の訪問地は北から撫順、瀋陽、鞍山、大石橋、北京、武清、太原、大寨、西安、延安、上海、杭州、長沙、韶山、広州、新開(ママ、新会の誤記か)。各記事はいずれも見開き2頁で完結しており、「文盲の帽子を脱ぐ」「文化大革命と子どもたち」「織機のボルトをつくる小学生」「人民解放軍一発百中、闇夜の鉄砲」「必需品は安く、ぜいたく品は高く」「昼間にビールをのむ話」「下戸のヨッパライ」「人民の「いい湯」」といった記事を収める。「日本軍国主義」とは植民地型収奪機構」「日本人のひとりひとりが中国人を虐殺した」といった記事の表題からもわかるように、日本の侵略を反省し、中国の発展を賞賛する立場をもとに執筆されている。姉妹編として『写真集・中国の大地を行く』がある。

(関智英)

写真集・中国の大地を行く／名古屋テレビ報道部

東京 青年書館 1972 151頁 [Q2005]

名古屋テレビ報道部『僕らと隣あう8億の友だち』の姉妹編で、同報道部6人による共同構成。写真の多くは万里の長城・天安門などポピュラーな中国紹介の写真だが、一部に

カラー写真があり貴重である。故宮暢音閣、天安門、前門、人民大会堂、新華門、北京飯店、頤和園仏香閣から臨む昆明湖、定陵、自転車置き場、自動車「上海号」、療原日夜百貨店、列車員（深圳～広州）、中国出国商品交易会、葵芸工場、ハリ麻酔手術、韶山広場、八路軍辦事処（西安）、紅旗広場（瀋陽）、大寨、上海（市内、上海大廈からの鳥瞰、外灘遠景、魯迅紀念館、魯迅旧居、578 連隊第 2 中隊、587 連隊半自動小銃訓練、196 師団戦車連隊、中国製 59 式戦車など）。白黒写真の「軍民憶苦会」「政治学習（『矛盾論』を読む小学校 5 年生）」なども興味深いものである。

（関智英）

中国見たまま／杉森久英著

東京 文芸春秋 1972 240 頁 [Q2016]

著者は出版社勤務を経て文筆業に入った作家で、同業の武田泰淳、永井路子、尾崎秀樹、および日中文化交流協会の木村菊雄〔菊男〕と 1967 年 4～5 月に中国を巡った際の旅行記である。武田泰淳はこのときの訪中経験をもとに、『揚子江のほとり 中国とその人間学』（芳賀書店 1967 年）を著しているが、本書は訪中から 4 年を経て、『諸君』連載の所論を一書にまとめたものである。一行の訪問地は、広州—長沙—北京—西安—上海—杭州—紹興。北京では許広平、趙安博、郭沫若らと会見し、また上海では作家協会の杜宣らと会談した。著者は、画一的な革命宣伝の空疎さに辟易し、経済や技術の遅れと停滞、極度に政治化した文学芸術のつまらなさに対して、忌憚のない批判を繰り返している。珍しい外国の賓客を取り囲む野次馬の群衆に対しても、著者は何度もつきはなした見方をしている。「そのしまりのない口もとや、無気力な目つきは、そのままこの人たちの精神内容の空虚を物語っているとしか思えない。中華人民共和国の人たちは、機会のあるごとに、革命によって中国人民は過去の悲惨な状態から救われ、前途に希望を見出して、建設にいそしんでいるというけれど、それはごく一部で、何億という人口の大部分は、まだ新政の恩恵に浴していないのではないかとしか思えない。」（179-180 頁）

（村田雄二郎）

document 中国：三留理男・写真報告／三留理男著：粟津潔、神戸明編

東京 主婦と生活社 1972 288 頁 [Q2022]

著者の最初の訪中は日中文化交流協会代表団に加わった 1971 年 9 月。2 度目は 1972 年から 6 月末から 8 月まで単身で訪中した。広州—北京—西安—延安—上海—南京のほか東北各地の工業地帯、革命の地井崗山一帯、各地の人民公社を取材した。取材目的は「一つには文革後の新しい中国にふれること、特に中国の人びとが何を考えているかを知ることであり、第二には東北地方における日本侵略軍の爪あとを、自分の目でたどること」である。軍事訓練に励む 10 代の民兵や延安の農村で出会った清華大学の学生、溶接工場の女工といった若い力。高層ビルが立ち並ぶ北京、上海やトロリーバスに自転車の群れ。市場や団地、住宅地に映る人民の衣食住。こういった生活風景も去ることながら、病院の脳外科手術まで見学しているのが珍しい。東北は工場の写真が中心だが、一部に女性労働者に焦点をあてているところがある。瀋陽の変圧器工場は労働者 5,050 名のうち女性が 1,200 名おり、別の鉄鋼工場の女性労働者（19 歳）は夜になると革命劇「紅灯記」のヒロインを演じるという。他にも体育学校の授業、「白毛女」「紅色娘子軍」などの革命劇、美術工芸品の生産現場、少年宮や学校の青少年、人民公社の農業、生活、医療などの中にも目を引く写真が少なくない。

（池田尚広）

新しい中国／菅沼不二男、飯島篤著

大阪 保育社 1972 153 頁 [Q2023]

直近 2,3 年に訪中した友人から集めた写真をもとに当時の中国各地の特徴を記す。名所旧跡に関するごく一般的な記述も多いが、市民の生活に根付く時代の特徴を捉えたところも少なくない。北京駅は母子専用の待合室や映写設備をもつ小待合室など設備が充実。交通の要路であった西単にはトロリーバスが行き交い朝夕には夥しい自転車の流れが出現。路傍では人民公社から来た安くて新鮮な果物が並ぶ。天津の塘沽新港には日本からの貨客船、北欧からの船がみられ国際色豊かである。上海の蘇州河以南の市街地にある瑞金劇場には大きな毛沢東の肖像が掲げられており、本文中では、映画・演劇は単なる娯楽ではなく「延安文芸座談会での講話」に示されたように社会主義建設推進の上で文化戦線の一端を担う重要な地位を占めている、と説明される。託児所は毎日連れ帰る日託と月曜から土曜まで預ける週託があり、託児費は月額 10 元 (1400 円) 以内。広州市内を貫流していた珠江の江岸にはアパートが立ち並び、かつての水上生活者の姿はもはやみられない。巻末は北京周辺、上海周辺、地方都市、革命の史跡に分けて 16 都市を紹介しているほか、「工場と人民公社と文化」と題して文化大革命、工農一体の生産体制、大慶油田、文芸路線などについて概説している。「相互の理解と友好のために」と題した文章では、国交正常化を果たし自由な人的往来が活発化するであろうことを見越して、訪中にあたっては社会体制の違い、歴史の再認識、中国人民の毛沢東への敬愛、中国人民の生活水準について注意すべきだと述べている。

(池田尚広)

松村謙三と中国 / 田川誠一

東京 読売新聞社 1972 246 頁 [Q1567]

本書は、日中国交正常化に取り組んだ政治家・松村謙三の評伝であり、詳細な松村の訪中記録を収める。著者の田川誠一は、松村の秘書を経て衆議院議員となり、松村同様、日中国交正常化に取り組んだことで知られる。そのため本書には、国交正常化前の田川自身の訪中や、1971 年に松村の葬儀参列のため王国権が来日した時の様子(いわゆる王国権旋風)についての記述もあり、興味深い。

(吉見崇)

1976

日本科学技術訪中代表団工場・公社等参観記録：1976. 6. 8～6. 29 / 日中経済協会編
出版地不明 日中経済協会 1976 59 頁 [10944]

近藤次郎(東京大学工学部長)ほか各界の専門家 9 名で構成された日本科学技術訪中代表団が、1976 年 6 月 8 日から 6 月 29 日まで、中国の工場や人民公社などを視察した。本書はその参観記録の一部を抜粋したものであり、通産省通商政策局北アジア課の「中国経済関係調査」の参考資料として作成されたものでもある。項目は「工業関係」「農業関係」「教育関係」に分けられ、各項目の主要な機関の歴史と現状がコンパクトに紹介されている。とりわけ、1949 年前後の状況を記す記述が興味深い。たとえば、「教育関係」の清華大学の欄には次のような記述がある。「(中略)解放前の大学は英米の教育制度をとっていたが、劉少奇はソ連の制度をそのままとり入れたのである。1953 年以前、制度、教材、試験科目等は英米のものであったが、53 年に新しく採用したものは、教材、試験制度、教育計画等すべてソ連そのままのものであった。だが、その本質は以前のものと同じであった。それは、プロレタリアの政治から離れ、工農兵大衆から離れ、実際の生産労働から離れた、三離脱の教育制度であった。(中略) [劉少奇は]プロレタリアの政治抜きで、専門知識だけを追求し、学生をブルジョアの方向へもってゆこうとしたのである。(中略)理科知識を身につけさえすればよいとの考えをひろめ、国家の前途、世界革命の命運に無関心にさせ、政治から離れさせ、工農兵大衆から離れさせ、ブルジョアの権利を拡大させた」。

(中村元哉)

1977

楊柳芽ぐむ中国の春／数原貢著
東京 学游書房 [1977] 288頁 [11768]

著者は1976年に訪中した日中農交友好訪中団26名の副団長、静岡県信用農協連専務理事。同年3月15日から30日まで上海—南京—揚州—西安—大寨—北京を訪問した際の記録である。訪中団の目的は友好交流であり調査が主ではないとしながら、各地で郭莊ダム、江都水利工程管理区などの水利施設、上海の馬陸人民公社、西安の魚化寨人民公社、昔陽県の大寨人民公社などを訪問した際の見聞を仔細にメモしている。その内容は農業生産と規模、農業用機械、作物と作付、農業生産による所得配分、農家の税負担や個人の生活、住宅事情などを含む。社会主義についての一般的な事柄にも関心を持っていた著者は「農業生産に関しては、確かに、私有と自由をめぐるは社会主義である。しかし生活についてのものは、食糧、住宅あるいは電気水道の施設などは社会主義的な取り扱いの中でこなされている。社会主義、社会主義と言っているもなるほどそうかと注意を引くものは少ない」としている。農業の現場以外では、上海の紡績工場、揚州の漆器工場、昔陽県の農機具工場などを視察したほか、北京の清華大学、南京の魯迅中学などで教育事情も視察した。鍼麻酔や医療保険の事情などにも関心を寄せている。

(池田尚広)

1978

新生中国に招かれて／小串靖夫著
東京 家の光出版サービス 1978 167、28頁 [11985]

1977年7月下旬、全国農協による訪中団一行8名が、中国農学会の招請で中国を2週間にわたり訪問した際の記録。訪問地は北京、上海、広州、桂州。北京では紅星人民公社、人民日報社、遺伝研究所を視察したほか、農業に関する座談会に参加した。座談会で説明にあたったのは、農業局副局長の張琪瑞、農学会副理事長の沈其益で、中国農業の生産状況、中国農業の路線・政策・方針、「農業は大寨に学ぶ」、中国農業の前途などについて説明された。要人では中日友好協会会長廖承志、全人代常務副委員長の譚震林などと会見した。反覇権条項をめぐる日中平和友好条約の調印、全国の農業の状況と発展などについて主に記録されている。上海では上海師範大学、普陀区少年宮を見学し、上海市農業科学院などを視察した。広州では郊外の羅崗人民公社のほか、かつて毛沢東が所長を務めた農民運動講習所を視察している。中国滞在中に訪問したいずれの場所でも現地で聴取した概要説明と併せて日本側の質問が記録されている。また視察した二つの人民公社に他の資料を併せた「人民公社の収支と農民の所得」も収録される。

(池田尚広)

1979

中国考古見聞／関西文物保護青年職員友好訪中団編
京都 関西文物保護青年職員友好訪中団 1979 90、13頁 [10910]

1978年7月5日から7月21日まで北京、安陽、洛陽、西安、広州などを訪問した関西文物保護青年職員友好訪中団一行26名の記録である。団長は奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部考古第一室長の町田章。関西2府4県の教育委員会に所属する埋蔵文化財専門職員と研究機関職員を基本に組織され、中国国際旅行社への申請を通じて実施された。北

京の頤和園、天壇公園、万里の長城、故宮博物院、安陽の殷墟、洛陽の漢魏洛陽城、西安の永泰公主墓、乾陵、大雁塔など各地の史跡や博物館を訪問した見聞を団員各氏が綴っている。文化財に限らず、北京市師範学院の視察報告や各地で見られた植物の一覧も含まれている。現地視察のほか国家文物局関係者との交流会も行われ、陳滋徳文物処処長、蔡学昌文物保護科学技術研究所副所長らとのやり取りでは、中国における文物保護の組織機構や専門家養成、人員不足、発掘における人的配置といった日中で共通して課題となっている事柄について意見交換を行った。巻末には訪中団の詳細な旅程が付される。

(池田尚広)

中国紀行：第二集／早稲田大学教員学生友好訪中団編

東京 早稲田大学教員学生友好訪中団 1979 83頁 [10978]

早稲田大学の教員と学生を中心に構成された訪中団の記録。同訪中団は1976年の早稲田大学中国研究青年友好訪中団を母体とし、1978年8月11～25日の約2週間、香港経由で深圳から入り、広州、鄭州、開封、洛陽を訪問した。滞在中、故宮、頤和園、万里の長城、明の十三陵、龍門石窟などの有名な史跡の他、広州農民運動講習所跡、鄭州の紡織工場付属の幼稚園、洛陽のベアリング工場などを訪れ、現地の人々と交流している。詳細な旅行記録というよりは団員の体験談・感想文集に近い。史跡訪問や交流体験のほか、人々の日常生活に注目した文章も多い。例えば、北京の街路や書店・百貨店、洛陽の映画・芝居鑑賞の場で見られた光景などが取り上げられている。日本と中国の人々の生活様式やマナーの違いに驚きつつも、そうした両国間の相違を柔軟に受け入れ、相手国を理解しようとする姿勢が見て取れる。ちなみに訪中団の構成員は以下の通り。団長・杉本達夫（文学部助教授）、副団長・上野理（文学部教授）、秘書長・矢作武（教育学部講師）、秘書・教育学部講師2名、修士課程院生1名。団員：教員13名、博士課程院生1名、修士課程院生4名、学部4年生6名、学部3年生10名。

(久保茉莉子)

1980

現代中国の農業／阪本楠彦編

東京 東京大学出版会 1980 7、298頁 [10902]

1979年6月21日から7月11日まで北京、成都、重慶、武漢、上海などを訪問した日中農交農業経済代表団一行10名の記録。団長は阪本楠彦東京大学農学部教授、秘書長は中島常雄東京農業大学農学部教授。中国社会科学院からの要請による訪中である。第Ⅰ部は5つの人民公社と1つの水利施設での聞き取りの記録である。第Ⅱ部は中国社会科学院副院長于光遠氏の講演、農業経済研究所・北京農業大学・西南農学院・華中農学院の概要紹介と聞き取り内容である。第Ⅲ部では各団員が自身の研究内容に照らして視察結果を纏めており、報告のタイトルはそれぞれ次のとおりである。「人口政策の現状」（土屋圭造）、「労働点数制と経済原則」（犬塚昭治）、「労働組織と分配について」（今村奈良臣）、「農業区画」と機械化の諸問題」（七戸長生）、「価格政策と生産費」（梶井功）、「市場と青果物流通」（中島常雄）、「人民公社と集団経済」（照井信）。終章は、同年8月に団長の阪本氏が「日中友好秋田県農業青年の翼」の顧問として訪中した際の記録をもとに大寨生産大隊について書かれている。巻末に付表「中国の度量衡」「農産物加工標準率」と代表団の旅程が収録されている。

(池田尚広)

1983

バレエ『白毛女』はるかな旅をゆく／清水正夫著

東京 講談社 [1983] 261 頁 [11995]

「白毛女」は河北地方の民謡をもとに 1945 年延安でオペラとして初演された。長春で映画化され 1952 年に日本に渡った後、松山バレエ団がバレエに改編、1955 年に初演された。以後、松山バレエ団は 1958 年から 1978 年にかけて中国で大公演を 4 回、小公演を 4 回行っている。1955 年、松山樹子はフィンランドのヘルシンキで開催された「世界平和大会」に参加し、帰路中国を訪問した。その際に周恩来、郭沫若のほか、「白毛女」のオペラ版、映画版それぞれの主役に会っている。1958 年の初訪中公演は長崎国旗事件の直前、日中関係がまだ良好な時期で盛況裏に公演を終えている。1964 年の第 2 回訪中公演は中国の政情が不安定な時期で、切符が一般売りされず、田漢など中国側の人物も見られなかった。一方で毛沢東と会見が設定された。日中国交正常化後の 1972 年に行われた第 3 回公演では「白毛女」に解放軍を登場させる演出を加えたが、蕭向前から「八路軍」とした方がいいとの意見を受けた。1978 年の第 3 回、第 4 回訪中公演では日中関係、内外情勢の変化に伴い公演環境の変化が見て取れる。特に第 4 回訪中公演で中国のバレエに対し「競争もないし、命がけで取り組む芸術の創造もない」と「自力更生」に矛盾と疑問を呈しているのが印象的である。序文は谷川徹三による。

(池田尚広)

1988

人民中国ひとりある記／前和之著

東京 揺籃社 [1988] 160 頁 [12608]

日本の一男子大学生である著者（のち小学校教員）が 1984 年 11 月 14 日から 1985 年 2 月 7 日まで中国を旅行した際の記録である。訪問地は広東、広西、雲南、四川、湖南、河南、陝西、甘肅、新疆ウイグル自治区、上海。都市部に限らず様々な土地を訪れ、外国人として好奇の視線を受けながらも人民服を着用するなどして中国人に馴染もうと努めて観光する。農村を訪れたり、長距離列車や現地の食堂を利用したりするなど市井の人々と多く交流し、各地域における庶民的な中国社会の一側面を伝えている。

(池田尚広)

1989

女ひとり中国を行く／山本美知子著

東京 北斗出版 [1989] 222 頁 [12627]

中国に憧れを持ちながら 1989 年に初めて訪中する機会を得た著者の記録である。タイトルはアグネス・スメドレー『女一人大地を行く』(Agnes Smedley, *Daughter of Earth*, 1935) のもじりか。訪問地は北京—内モン—甘肅—チベット—陝西—雲南—上海—香港で、手探りの旅行の中で未開放地区の訪問も試みている。著者は大学時代に 1970 年の全共闘運動をきっかけに社会問題に関心を持ち始め、「現代中国研究会」サークルに入った。「革命の都」延安訪問時には自身の学生時代を思い出し、全共闘の時代とはなんであったのか自問自答する。全体としては一般的な旅行の記録であり、各地域での見聞や中国を旅行する上での方法、知恵、旅の決算報告が書かれている。巻末には中国人の給料、中国人の平均寿命、中国の物価を纏めた「見ていて集めた生活情報」、「行った人だけが笑える中国旅行いろはカルタ」が収録されている。

(池田尚広)